須恵器瑕の製作技術

植野浩三

一、はじめに

須恵器の通有の器形の一つとして瑕がある。この瑕は、五、六世紀を中心に製作・使用されたものであるが、六世紀になると形態、用途に大きな変化を生じている。小稿は、この瑕の製作技術を検討し、製作過程を復原することに主要な目的をおいているが、大局においては須恵器全体の製作技術との関連を指摘し、基本的な技法としてその位置付けを行なうものである。また、一つの法則的な手法を抽出することによって、須恵器の原則的な製作技法のあり方を研究することも目的としている。

須恵器の製作技術の研究は、田中琢、田辺昭三氏らを中心に過去いくつかの成果をおさめている。田中琢氏は、奈良時代以前の須恵器はそのほとんどが第一段階で粘土紐巻きあげ成形を行ない、次いで第二段階で小型品はロクロ成形、大型品は叩き締めを行なうとして、従来考えられていた、小型品の粘土塊ひき出し成形に対して重要な指摘を行なった。(1)

一方、田辺昭三氏は、陶邑古窯址群の調査成果に基づいて製作技術の検討を行なっている。それは、須恵器の製作過程を三段階に分け、第一段階を粘土紐巻あげ、第二段階をロクロ成形、各部接合、細部のひき出し、各部の打圧、第三段階をナデ、削りなどの調整とするものである。成形の第一段階では、大・小型の器形にかかわらず粘土紐巻きあげを行なうとし、第二段階でほぼ全体の形態を完成させるとしている。そのほか、手法の細部にわたる検討を行ない、いくつもの問題点についても指摘している。(2)

また、近年になって横山浩一氏は、須恵器にみられるタタキ目文、同心円文などの細部にわたる観察を行ない研究成果を発表している。特に、壷、甕形土器に施されたタタキ目文について、その先後関係を入念に観察し、製作技法について論じている。それは、壷、甕は、側面をまずタタキ成形し、そののちに底部を丸く叩き出しながら成形を行なうというものである。(3)

以上掲げたものの他に、いくつかの研究があるが、さしずめ右記の研究成果を基にして論を展開していくことにする。また、須恵器の製

作過程の復原を主要な目的とするため、小稿では編年的研究等には直接触れず、製作技法の大筋を把握することに努めた。しかし、六世紀後半代になると、各地に地方窯が存在し、少なからず地方差が生じていることは確実であるが、右記の主旨からして、地域間の差違を検討することは行なわず、あくまでも基本的な手法の抽出を主眼においていることをことわっておきたい。このような問題は、今後の課題として、地方窯ならびに出土遺物の検討として行なっていきたいと考えている。尚、小稿で使用している資料は、おもに大阪府・陶邑古窯址群出土のものである。(4)

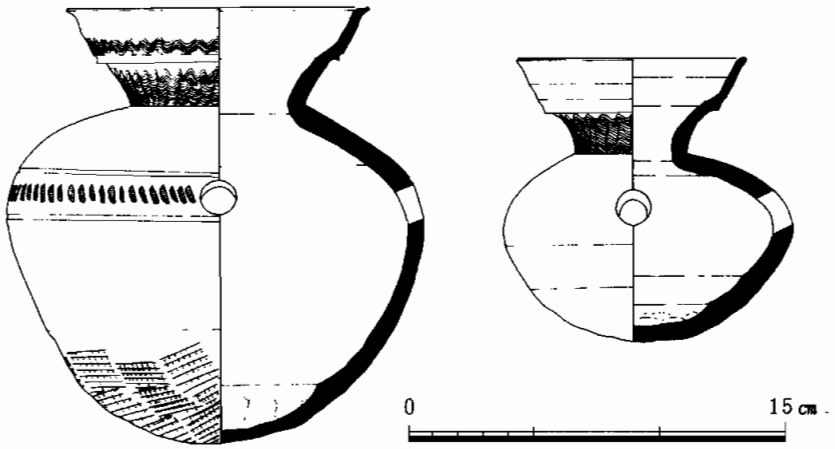


図1　大型瓹と小型瓹

二、瓹製作技術の検討

瓹のなかには、体部に外反する口頸部を付け、肩部から胴部にかけて円孔を穿った通有のもののほかに、樽形瓹、鳥形瓹、二重瓹などがあるが、これらに関しては別稿にゆずるとして、小稿では除外している。瓹は、その規模から大型と小型に分類されるが、大型瓹の場合Ⅰ期（五世紀～六世紀前半）のなかで消滅することが言われている。一方、小型瓹は五、六世紀を中心として存在しているが、一部では七、八世紀にわたっているものもある。小稿では、資料上の制約から五、六世紀の瓹に限定して観察を行なっていくが、なかでも六世紀後半代（Ⅱ期）のものと、それ以前（Ⅰ期）の瓹とは区別して検討・記述していくことにしたい。

須恵器は弥生土器、土師器とは異なり、窖窯を使用してかなりの高火度で焼成するため、応々にして土器表面に自然釉がかぶさり、土器

観察を困難にしていることがある。しかし、この須恵器の堅緻・耐水性は、器表面の諸痕跡をよく残し、土器観察に多大な役割を果たすことも事実である。そこでまず、成形技法を明らかにするために、甕にみられる手法を観察し、いくつかの諸特徴をあげてみよう。

Ⅰ期の甕　大型甕、小型甕はともに存在するが、相方ともかなり共通の手法を用いている。口頸部は、すべて横ナデによって成形され、櫛描波状文等の装飾を施している。この口頸部は、体部とは別に製作し、接合されたと考えられる。体部外面は、上半を横ナデ成形し、肩部から胴部にかけて装飾を施し、円孔を穿っている。大型甕は、そのほとんどがタタキ成形後に横ナデ成形を行なっている。胴部から底部にかけては、器表面の凹凸が著しく目立っているが、この部分は、ほとんどの例が横ナデ、回転ヘラ削りなどを施すことなく、おもに、ナデ、タタキ、不定方向のヘラ削り痕を残している。また、タタキ成形後にナデを施すものもあり、その手法は様々であるが、陶邑古窯址群TK二〇八号窯出土遺物で報告されているように、小型甕の底部外面を入念に平滑化し、光沢をもつものも存在している。いずれにしてもここで重要なことは、底部外面の成形・調整は、例外なく肩部から胴部の成形後に行なっていることである。底部のナデ、タタキ目、ヘラ削り痕は、胴部の横ナデ痕を切り込んで施されており、成形の先後関係をつかむことができる（図版六―五）。

次に内面の観察にうつろう。胴部から口頸部にかけては、ほとんどの例が横ナデ成形であるが、大型甕も例外ではなく、同心円文などの痕跡を残すものは稀少である。しかし、体部と口頸部の接合部には、しばしば粘土紐の継ぎ目痕を残している。底部内面は、外面と同様に凹凸が著しく目立っており、上方より棒状の工具で押しつけた痕跡を例外なく認めることが出来る。この痕跡は、甕の規模によって施す範囲を異にしているが、底部外面にみられた凹凸と対応して、かなりの密度で認めることが出来る。痕跡から復原する工具の形状、規模は様様であり表面の平滑な凸状のもの、平坦な面をもつものなどがある。押しつけを行なった部分は、大半がその痕跡を残すが、稀に粗いナデを施すものもある。この押しつけは、胴部の横ナデを切り込んで施され、外面の場合と同様に手法の先後関係が指摘出来るのである。断面の観察によれば、胴部から底部に至る部分にかなり肥厚した箇所を認めることが出来る。押しつけは、この部位以下に施され、手法の先後関係とともに成形段階の復原を可能にしている（図版六―一～四）。

Ⅱ期の甕　Ⅱ期の甕は小型甕に限られる。それも、形態を大きく変化させ、本来の機態をしだいに失なっていく段階のものである。原則として、ほとんどの例が横ナデ成形で製作され、体部、口頸部に装飾を施している。胴部から底部にかけては、横ナデ成形ののち、回転ヘラ削りを行なうものが大半であるが、ナデ成形のみのもの、あるいはヘラ削りののちにナデ調整、ハケ目調整を行なうものもある。タタキ成形を行なうものはほとんどなく、粘土紐巻きあげからロクロ成形へ直

接移行し、底部の回転ヘラ削りに至っている。体部内面もすべてが横ナデ痕を残し、Ⅰ期に認められた底部内面の押しつけ痕は、まったくその痕跡を認めない。

以上が甕にみられた手法の大要であるが、Ⅰ期とⅡ期の甕の場合、大きな相違点を認めることが出来た。それをここで整理すると、形態的には、Ⅱ期の甕は小型の器形に限られ、口頸部を異常に発達させて製作していること。手法的には、底部内面にみられた押しつけの痕跡の有無をあげることが出来よう。Ⅰ期の甕は、底部内面に棒状の工具による押しつけ痕が普遍的に認められるが、Ⅱ期の甕はこの痕跡をまったく認めないということである。これは同様に、底部外面の成形・調整にも関係して、Ⅰ期の甕が主としてナデ、不定方向のヘラ削り、タタキ、ハケ目を施すのに対して、Ⅱ期の甕は、大半が回転ヘラ削りを行なっていることにおいても指摘できる。

このような手法的な差違、特徴は、当然のことながら、Ⅰ期とⅡ期の製作技術、製作技法の相違を反映していると考えられる。特に、底部の成形に関しては、顕著にうかがえるところである。Ⅰ期に主体的に用いられた技法が、技術的水準、形態的要求のなかで変革されていったと理解できるのである。この製作過程の復原、ならびに歴史的要因については、次項で詳しく述べることにして、ここでは一応の観察成果を指摘するに留めておきたい。

三、甕製作過程の復原

前項で手法の観察を行なってきたが、ここでは、それに基づいて製作過程の復原を行なってみたい。(5) まず、Ⅰ期の甕についてみると、成形の第一段階では、大・小型品ともロクロ盤上で粘土紐を巻きあげて粗形をつくる。この場合、平坦な盤上で粗形をつくるため、粘土紐巻きあげは側面のみ行ない、底部は平底を呈している。次の第二段階では、大型品はタタキ成形を行なって器壁を締め、全体の形をつくり出し、そののちにロクロ成形を行なって側面を完成させる。この段階で器表面にみられるタタキ目文、同心円文はほとんど消され、ロクロ目を残すのみとなる。小型品も同様に、この段階でロクロ成形を行ない形をつくり出している。次に、同じ手順を踏んで製作しておいた口頸部を接合して、胴部上半の成形を完了させる。そして、最後に底部をつくり出す作業に移る。側面のロクロ成形の段階では、器体を固定するため依然として底部は平底を呈しているが、この段階で底部は丸くつくり出される。底部内面の押さえつけの痕跡が示すように、器体はロクロ上から離され、底部は内面から棒状の工具によって一応に押しつけられ、突き出される。この作業は、小型甕あるいは大型甕の場合も、器体を掌の上に載せて行なった可能性が強く、外面に残る凹凸もこの時生じたものである。断面にみられる胴部下方の肥厚は、その部位がロクロ成形時における胴部下端、あるいは底部であることを示し

ていると考えられ、中央部のみを押しつけて、底部を突き出した結果生じた痕跡として理解できる。言いかえれば、肩部から胴部にかけては、タタキ成形ののちにロクロ成形、底部は最終段階で突き出しを行なって器壁を薄く仕上げているが、その部位は、底部と胴部との屈曲部として、器壁を薄く仕上げることなく、その痕跡を残していると考えられる。そしてこの痕跡は、製作過程を考える上での有力な根拠になっているのである。底部の突き出しが完了すると、次に底部外面の調整が行なわれる。一般的に、ナデ、不定方向のヘラ削り、ハケ目などを施す。同時にタタキ成形を行なうものもあるが、これはむしろ、底部突き出しと併行して行なわれる技法であろう。

底部の成形が、肩部、胴部の成形後に行なわれることは、手法の観察等でも明らかであるが、口頸部の接合との先後関係については不明である。ただ、製作の順序からいけば、口頸部を接合し、あるいは装飾を施したのちに底部をつくり出すのが一番合理的であると考えられる。製作時における器体の安定と、底部内面の押しつけ痕をナデ消すことなく残している点においても理解できよう。しかし、特に、五世紀代の頸部のすぼまった甕についてみると、広範囲に底部を突き出すことは、非常に困難な作業であろうし、底部外面をタタキ成形している甕についても、内面の当て具の問題が生じてくる。したがって、この是非については一応捉えおくとして、底部の突き出し技法が、甕の基本的な成形技法として用いられている点に注目しておきたい。

第三段階は調整である。先に述べた底部外面の調整のほかに、胴部に回転ヘラ削りを行なうものもある。文様、円孔もこの時点で施されたと考えられる。

次にⅡ期の甕について述べよう。成形の第一段階では、Ⅰ期と同様に粘土紐巻きあげによって粗形がつくられる。第二段階になると、そのほとんどがロクロ成形によって行なわれ、細部のひき出し等も行なわれる。しかし、この段階の成形は、底部から口縁部まで一気にして行なわれるのではなく、体部のみをロクロ成形したのち、さらに粘土紐を巻きあげてロクロ成形し、口頸部をつくり出す方法によっている。(6) そして、最後に調整を行なう。調整は、文様、円孔を施すのと併行して、底部の回転ヘラ削りを行なう。この段階で、平底の底部は丸底に仕上げられ、全体の形を整えることになる。回転ヘラ削り以外の手法としては、不定方向のヘラ削り、ナデ、ハケ目等を施す例があるが、Ⅰ期にみられた突き出し技法によらないのは共通の特徴である。尚、このヘラ削りは、調整の段階で行なわれるが、全体の形態を整える意味においては、成形の第二段階と同様の役割としてとらえることができるのである。

以上のように、大筋ではあるが、Ⅰ・Ⅱ期の甕の製作過程を復原することが出来た。底部をつくり出す技法においては、Ⅰ期とⅡ期の間でかなりの相違が認められ、製作技術史上の重要な画期として把握でき、特記すべき事柄であると考えられる。

四、甕製作技術の評価

甕にみられる個々の手法、製作過程の復原は先に述べた通りであるが、従来、さまざまな分野から注目されてきた底部内面の凹凸は、丸底の底部をつくり出すための突き出し痕として理解でき、Ⅰ期の甕における普遍的な手法として把握された。底部の突き出し、あるいは叩き出しは、壷、甕においてすでに明らかにされているように、甕も例外にもれない一つとして知られるのである。横山浩一氏によれば、壷、甕は、五〇センチメートルを超えるような大型品を除いて、側面のタタキ成形ののちに、一応に底部を叩き出しているという。底部外面に残るタタキ目痕は、側面のタタキ成形ののちに施され、その重複関係は顕著に認めることができ、断面による器壁の観察でもこれに順じてことが指摘されている。(7)

壷、甕に施されるこのような技法が、甕にも同様に行われることは特に丸底に製作する上において、必至の条件であったと解される。したがって、甕にみられるこの手法は、特別なものではなく、須恵器製作技術の一連の技法として把握されるのである。

Ⅰ期の甕が、壷、甕等と同様な技法を用いていることは、甕を含めた壷・甕形土器の製作にあたって、製作技術に一つの法則性が存在したからに違いない。たとえば、蓋杯、高杯、把手付椀など、比較的小型の、口頸部の開口する須恵器に関しては、底部外面をヘラ削り等の調整を行なうことによって形態をつくり出している。一方、壷、甕、甕などの大型の器形で、口頸部のくびれるものに関しては、底部を一応に突き出し、叩き出し成形により形態をつくり出している。このように、須恵器の製作にあたっては、大型、小型の規模、形態によって製作技法を大別することができ、大略ではあるが器形によって製作技法が限定出来るのである。

小型甕は、全体の規模からすれば小型に属するが、底部の成形は大型甕と同様な技法を用いている。これは、形態に左右される技法の限定であり、製作技法が形態を規定していると考えられ、一つの法則性が指摘出来るのである。

一方、Ⅱ期の甕は一変して、外面の調整によって底部をつくり出している。この現象は、形態的な要求として、あるいは壷、甕にみられる製作技術の法則性から脱した、一つの技術的な変革としてとらえねばならない。壷、甕に施される底部叩き出しの法則的な技法は、須恵器製作の基本的な技法として後代まで用いられているわけであるから、直接この技法の消滅にはつながらない。むしろ、蓋杯、高杯などの外面調整と共通する技法として理解でき、甕製作史上の一画期とすることが出来よう。

この技法の初源期としては、大概的にⅡ期としているが、全体的な位置付けにおいては相違ない。ただし陶邑ＭＴ一五型式の段階では、

底部内面に押し込み痕を認めるものの他に、内面をロクロ成形のみで仕上げているものもある。したがって、甕製作技術の変革は、このMT一五型式からTK一〇型式の段階で確実に行なわれたと考えられるのである。そして、この技法は、六世紀代を通じて普遍的な手法として施されていく。

図版六―六に示した例は、鳥取県東伯郡東伯町代代古墳より出土した甕の底部内面である。[8] この甕は、六世紀後半代に属するものであるが、依然として底部内面に突き込み痕を残している。体部内外面をロクロ成形したのち、内面から突き込みを行ない、さらに、底部外面に回転ヘラ削りを施している。この痕跡はいうまでもなく、I期の甕にみられた底部突き出しの技法であるが、外面の回転ヘラ削りを併用している点に特徴がある。この甕の場合、底部の成形はあくまでも回転ヘラ削りによる部分が大であり、内面の突き込みは主体的な要素になっていないところから考えると、むしろ特異な例として理解でき、形式的に施された可能性がある。しかし、形式的かつ地方的特色とはいえ、このような痕跡を残す須恵器が存在することは、甕の製作技術を検討しまた技法の変遷を考える上においても興味深い資料である。

五、おわりに

これまで述べてきたように、甕の底部成形は、壷、甕等に一般的に行なわれる底部突き出し（叩き出し）技法によって行なわれていた。これは、須恵器製作技術の一連の技法として、一つの法則とでもいえるべきものとして施されている。仮に須恵器を壷、甕等の大型品と、蓋杯、高杯、把手付椀等の小型品に分類するとすれば、甕にみられるこれらの手法は、形態の要素とともに大型品に一般的、かつ共通した手法として把握できるのである。

II期の甕は、I期の甕と製作技法を異にして、専ら小型品にみられる技法を施すようになる。これは、甕の製作技術上において、一つの変革期であり、画期としてとらえることができる。「『陶邑古窯址群』I」によれば、須恵器生産の展開を三つの画期としてとらえることがいわれている。[9] その第一の画期は、長脚一段透し高杯の出現期であり、須恵器の量産化を暗示する製作技術上の変化があらわれる時期である。そして、この時期は、高杯や甕等の器形が実用性をはなれて装飾化の傾向を示し、量的にも特殊な発達を示すといわれている。小稿で指摘した甕製作技術の変革期が、この第一の画期と合致することは単なる偶然ではなく、須恵器生産の展開のなかで、同様な変化をもたらしたと考えられる。

したがって、甕にみられた製作技法の変革は、器種組成、技法の省略化、形態の変化、生産の展開といった須恵器生産全体の枠のなかで組み立て、研究されるべきものであり、しいては、生産と供給、需要のあり方を考察する上においても留意せねばならない事柄であろう。

ちなみに第一の画期では、長脚一段透し高杯の出現、甑、高杯の装飾化とともに、提瓶、横瓶の出現、大型甕、直口壷、把手付椀、甑等の器形の消滅が指摘されている。

小稿では、甕の製作過程の復原を基にして、須恵器全体の製作技術の法則性について述べ、その位置付けを行なってきた。このような観点、ならびに成果は、須恵器の製作技術を研究する上においても重要な位置を占め、また地方の須恵器を研究する上においても有力な手段になると考えられる。

註

(1) 田中琢「須恵器製作技術の再検討」（『考古学研究』第一一巻第二号）一九六四年。

(2) 田辺昭三『陶邑古窯址群』Ⅰ（『平安学園研究論集』第一〇号）一九六六年。

(3) 横山浩一「須恵器の叩き目」（『史淵』第一一七輯　九州大学文学部）一九七九年。

(4) 平安学園保管資料、ならびに筆者の管見によるものを中心に用いている。

尚、資料の実見、ならびに小稿を草するに際して、田辺昭三、萩本勝氏ほか諸関係の方々から、有益な助言、協力をいただいた。記して謝意を表します。

(5) 先に述べたように、製作過程の復原は、田辺昭三『陶邑古窯址群』Ⅰによるところが大きい。前掲註(2)。

(6) 成形の各段階は、単に成形の順序を表わすのではなく、成形時における技法の位置付けを各段階別に示したものである。したがって、第一段階（一次成形）と第二段階（二次成形）が反復することもありうるし、第二段階と第三段階（調整）が逆転する場合もある。田辺昭三『須恵器大成』角川書店　一九八一年。

(7) 前掲註(3)。

(8) 亀井熙人ほか『代代古墳発掘調査概報』鳥取県東伯町教育委員会　一九七七年。

(9) 前掲註(2)。

図版一　（古原論文参照）

図1

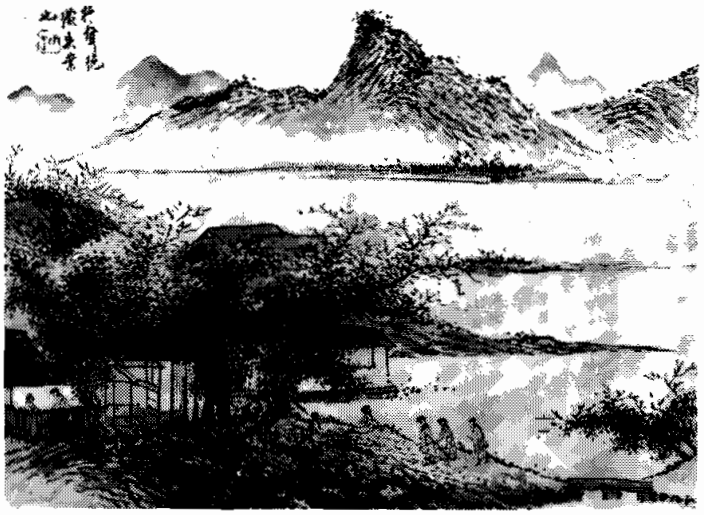


図2

図3

図版二　（古原論文参照）

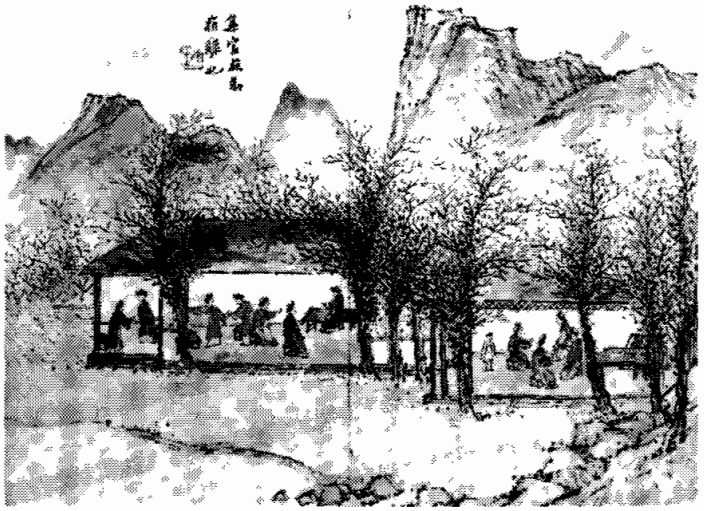


図4

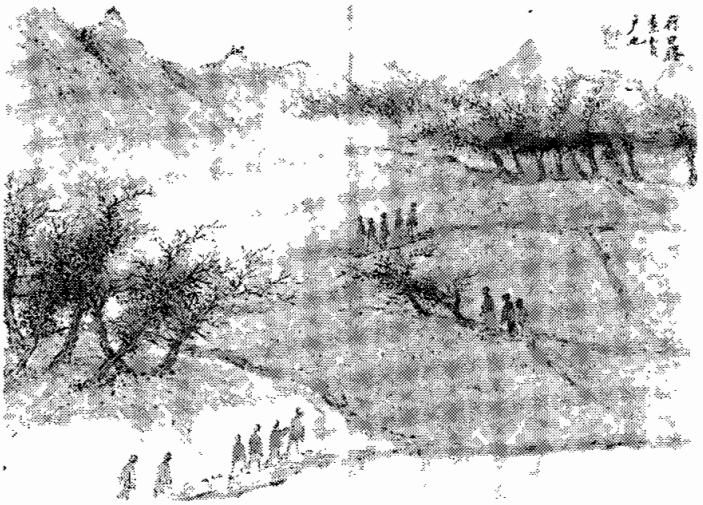


図5

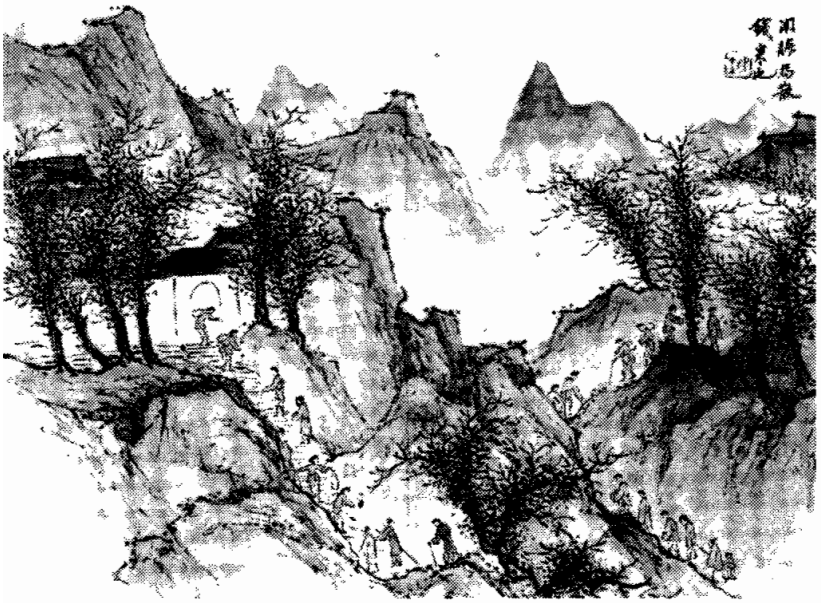


図6

図版三　（古原論文参照）

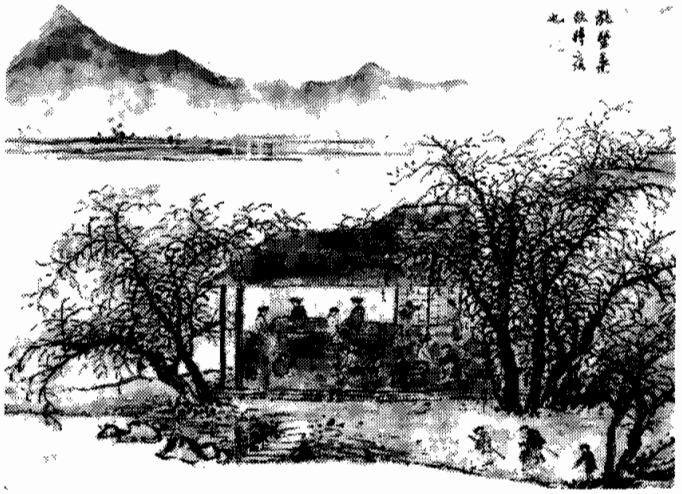


図7

図8

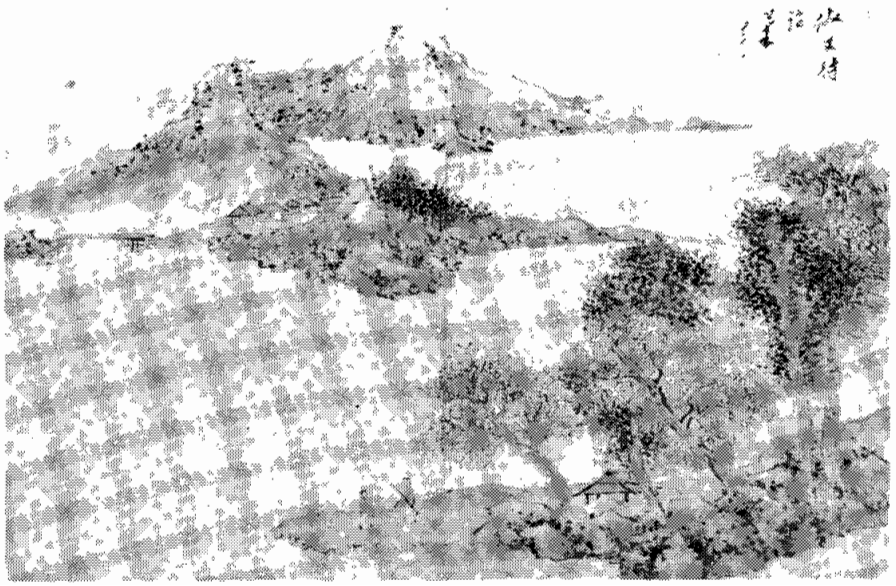


図9

橋本家蔵「吟餘雅賞冊」

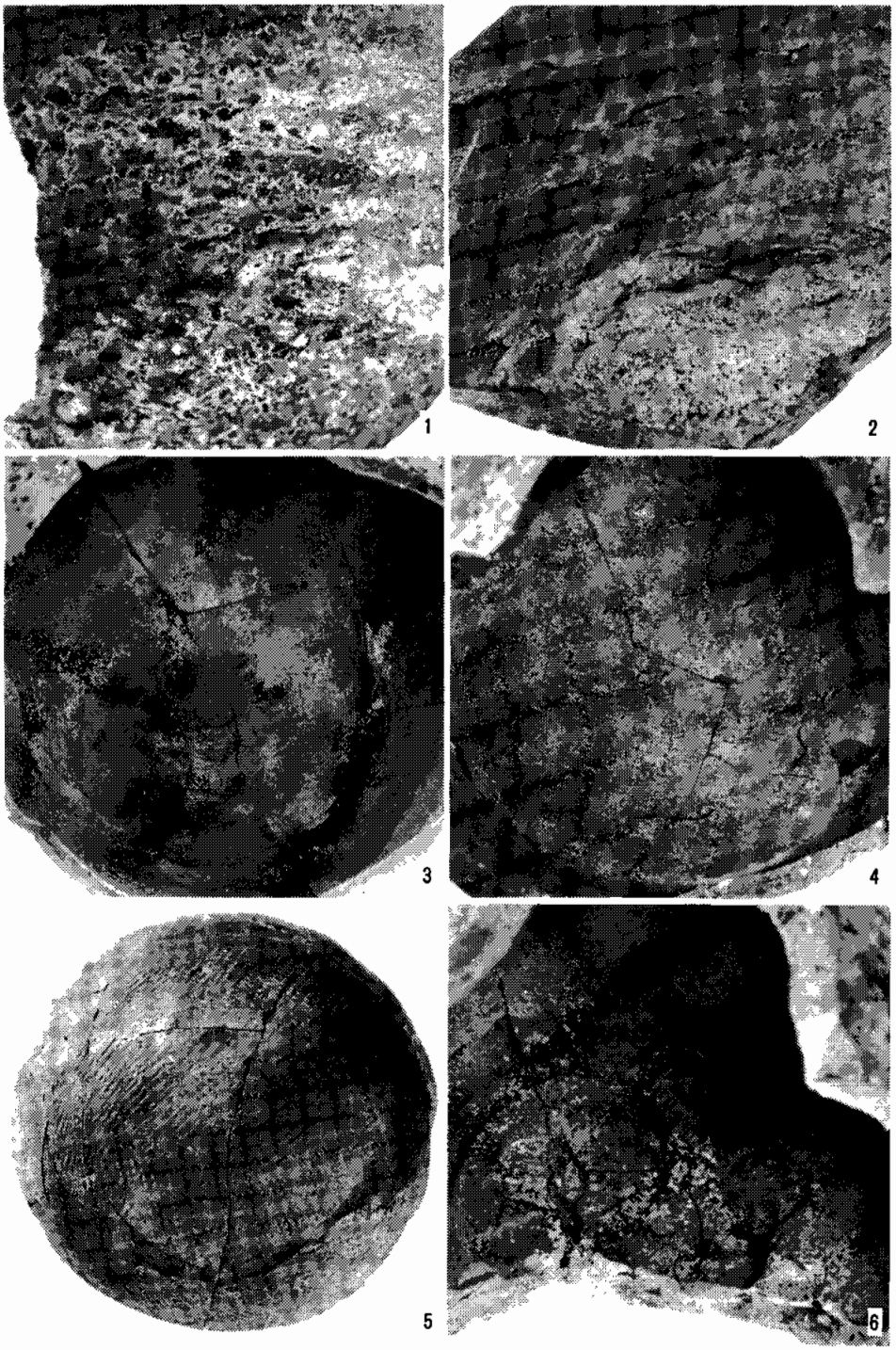
図版四　（古原論文参照）

中村家蔵「山水倣古冊」　図10

図版五　（中島論文参照）

笠置曼荼羅　大和文華館蔵

図版六　（植野論文参照）



1～4、6　甑底部内面（1、2大型甑、3、4小型甑、6、小型甑　Ⅱ期）
6、鳥取県代代古墳出土、その他は陶邑古窯址群出土